

## 現代日本語における動詞の結合関係

——動詞語義記述の手段として——

Verbal connection in modern Japanese

——As a metalanguage for lexical meaning of verbs——

岡田 幸彦\*

OKADA Yukihiko

### 【要旨】

語の意味（語義、記述的意味、語彙的意味）を記述した実例が辞書の語義の説明である。しかし、異なる国語辞典の語義の説明を比較すると、名詞の語義の説明は相対的に異同が小さいが、動詞の語義の説明は辞書によって大きく異なる。動詞の語義を客観的に記述することが可能であろうか。Vinogradov（1954）、奥田（1968-72）、宮島（1972）、Lyons（1977）等によって、動詞の語義とその動詞が用いられる結合関係との間に対応関係があることが指摘されているが、現代日本語について特定の格の名詞と動詞との結合関係を記述した村木（1991）、小泉（2001）等においても、格形式のとりえ方や位置づけが異なっている。本稿では、名詞の格形式の中で、特に、主体を表す「名詞+が」との結合、動詞の語義の特徴に応じて文中での意味が決定される「名詞+を」「名詞+に」との結合において、その動詞の語義の特徴が明確に現れること、それらが動詞の語義の記述の客観的な根拠となり得ることを提案する。

キーワード：動詞の語義、名詞の格形式、結合関係

### 0. はじめに——言語記述における「意味」

「意味」「meaning」という語は、さまざまな意味において用いられる。例えば、Lyons（1977）は、いくつかの用法における「meaning」「mean」を挙げている。

(1) What is the meaning 'sesquipedalian'?

（'sesquipedalian'『1 フィート半の』の意味は何か?）

(2) I did not mean to hurt you

（私はあなたを傷つける意味はなかった（≠'intend'意図する））

(3) He never says what he means

（彼は自分が意味することを決して言わない）

(4) She rarely means what she says

（彼女は自分が言うことをめったに意味しない（≠'intend'?））

(5) Life without faith has no meaning

\* おかだ・ゆきひこ、埼玉大学教育機構非常勤講師、言語学

(信仰のない人生は意味がない (=‘significance’ ‘value’意義／価値))

(6) What do you mean by the word ‘concept’?

(‘concept’ 『概念』 という語であなたは何を意味するのか? (=‘intend’?))

(7) He means well, but he’s rather clumsy

(彼は悪気はないが、かなりぎこちない (=‘intend’?))

(8) Fame and riches mean nothing to the true scholar

(名声と富は真の学者には何も意味しない (=5))

(9) Dark clouds mean rain

(薄黒い雲は雨を意味する)

(10) It was John I meant not Harry

(私が意味したのはジョンでハリーではなかった (=‘intend’?))

(以上, Lyons (1977 : 1-2) から)

では、言語記述においては、何を「意味 meaning」として扱うべきであろうか。Lyons (1977) は、言語に「記述的機能 descriptive function」「社会的機能 social function」「表現的機能 expressive function」を認め、それぞれに対応する「記述的意味 descriptive meaning」「社会的意味 social meaning」「表現的意味 expressive meaning」を挙げている。

Let us simply assume that these are three more or less distinguishable functions: the descriptive, the social and the expressive. Correlated with these three different functions we can recognize three different kinds of semantic information encodable in language-utterances. Descriptive information (or descriptive meaning) is factual in the sense explained above: it can be explicitly asserted or denied and, in the most favourable instances at least, it can be objectively verified. An example of an utterance with descriptive meaning is the statement *It is raining here in Edinburgh at the moment*. Whether this utterance necessarily or normally contains any additional non-descriptive information is a question we may leave on one side for the present. It is descriptive meaning, as we shall see later, that has been of central concern in philosophical semantics. Other terms that have been used in the literature for this aspect of meaning include ‘referential’, ‘cognitive’, ‘propositional’, ‘ideational’ and ‘designative’. (Lyons (1977 : 50-51))

(これらが多かれ少なかれ区別可能な三つの機能であると簡便に仮定しよう: 記述的、社会的、表現的。これら三つの異なる機能と相互に関係して、言語発話に記号化されうる三種類の意味的情報を認めることが可能である。記述的情報 (あるいは記述的意味) は上に説明した意味において事実的である: 明確に断言あるいは否定されうる、そして、少なくとも大抵の有利な例において、客観的に立証されうる。記述的意味を持つ発話の例は、「ちょうど今ここエジンバラで雨が降っている」という陳述である。この発話が必ずあるいは普通にどんなものでも付加的な非記述的情報を含むかどうかは、さしあたり無視できる問題である。後に見るように、哲学的意味論において中心的な関心になってきたのは、記述的意味である。意味のこの見方の文献

において用いられてきた術語は、「指示的」「認識的」「命題的」「観念的」「明示的」を含む。）

Lyons (1977) は「記述的意味」に関係するものとして指示 reference、意味関係 sense 等を挙げるが、語の「記述的意味」に直接関係するのは、語彙素 lexeme<sup>1</sup>の denotation である。

By the denotation of a lexeme ... will be meant the relationship that holds between that lexeme and persons, things, places, properties, processes and activities external to the language-system. (Lyons (1977 : 207))

(語彙素の denotation によって…、語彙素と、言語体系外の人、物、場所、特徴、過程、活動との間に保たれる関係が意味される。)

一方、Vinogradov (1953) は、「語の語彙的意味 лексическое значение слова」という名称によって、語の意味を以下のように規定する。

Под лексическим значением слова обычно понимают предметно-вещественное содержание, оформленное по законам грамматики данного языка и являющееся элементом общей семантической системы словаря этого языка. (Vinogradov (1953 : 169))

(語の語彙的意味の名称のもとに、通常、所与の言語の文法規則によって形成され、その言語の語彙の一般的意味体系の要素である物的・物質的内容が理解される。)

本稿では、Lyons (1977) による「語彙素」の「記述的意味」と、Vinogradov (1953) による「語」の「語彙的意味」とを同等のものとしてとらえ、以下では「語」の「語義」と呼ぶことにする。

では、語義を記述する確実な方法を見出すことができるだろうか。

## 1. 国語辞典の意味説明

現代日本語の語の語義を記述した実際の例の一つが国語辞典の説明である。『三省堂国語辞典第七版』(2014) (以下『三国』と表記)、『三省堂新明解国語辞典第七版』(2012) (以下『新明解』と表記) という、二種類の国語辞典の語義の説明の例を比較する(ふりがな、アクセント表記(『新明解』等、補足的説明は省略する)。

---

<sup>1</sup> Lyons (1977) は、語彙素 lexeme を以下のように定義する。

Let us now consider the following metalinguistic proposition about English: “The words *found* and *find* are different forms of the same word”. The term ‘word’ is clearly being used in two different senses here (both of them quite normal in technical as well as non-technical discussion). In the sense of ‘word’ in which *find* and *found* are said to be forms of, or belong to, the same word, it is vocabulary-words constitute one subclass of what (with some support in current linguistic usage) we are calling lexemes. (Lyons (1977 : 19))

(英語についての以下のメタ言語的命題を考察しよう：「語 *find* と *found* は同一の語の異なる形である」。『語』という術語はここで明らかに二つの異なる意味において用いられている(両者とも専門的議論においても非専門的議論においても全く通常である)。find と found が同一の語の形である、あるいは、同一の語に属する、と言われる『語』の意味において、(現在の言語学的用法における支持とともに)我々が語彙素 lexeme と呼んでいるものの下位類の一つを構成するのは語彙一語である。)

まず、名詞について比較する。例えば、「つくえ」の語義は以下のように説明されている。

つくえ [机] (名) 本を読んだり字を書いたりするときなどに使う台。 (『三国』)

つくえ【机】書物を読んだり字を書いたりするための台。「一に向かう／学習一」〔古くは、飲食の器物を載せる台をも指した〕一脚：一基 (『新明解』)

ともに「本を読んだり字を書いたり」(『三国』)「書物を読んだり字を書いたり」(『新明解』)という使用目的が説明され、同じ「台」という言いかえ<sup>2</sup>がなされている。同等の説明がなされていると言うことができる。

同じく名詞である「やね」の語義の説明を比較する。

やね [屋根] (名) ①建物の上のおおい。「一づたい・丸一・一がわら」

②雨や露をふせぐもの。「苗床の一・乗用車の一」

③いちばん高い所のたとえ。「世界の一ヒマラヤ」 (『三国』)

やね【屋根】〔雨露・風雪・寒暑などを防ぐために〕家・建物の上部につけたおおい。また、それと同じ働きをする、物の上につけたおおい。「台風で一を飛ばされる／世界の一〔=一番高い所〕、ヒマラヤ山脈／一つ一の下で〔=生活を共にして〕暮らす／丸一・一伝い」 (『新明解』)

『三国』が三つの下位分類をしているのに対し、『新明解』は一つにまとめている、という違いはあるが、「建物の上の」(『三国』①)「家・建物の上部につけた」(『新明解』) + 「おおい」という説明の仕方は共通しており、「屋根づたい」「丸屋根」という例が両者に挙げられている。また、「雨や露をふせぐもの」(『三国』②)は、「〔雨露・風雪・寒暑などを防ぐために〕」「それと同じ働きをする、物の上につけたおおい」(『新明解』)という部分と共通しており、『三国』は「同じ働きをするもの」を下位分類として独立させているのに対し、『新明解』は独立させずにまとめているが注目している部分は同じである、ということができる。さらに、『三国』が「③いちばん高い所のたとえ」を独立させ「世界の屋根ヒマラヤ」を例に挙げているのに対し、『新明解』は同じ例に「〔=一番高い所〕」という注釈をつけている。

<sup>2</sup> 言語を記述するための言語はメタ言語 *metalinguage* (⇔対象言語 *object-language* (Lyons (1977: 10))) 等と呼ばれる。宮島 (1966) は語義を説明するための「説明語 (⇔対象語)」について、語義を同一言語で説明する「言いかえ」の問題点「どうどうめぐり」を挙げながらも、積極的な意味を見出している。

…ことばでことばを定義するかぎり、結局はどうどうめぐりをさけることはできない。…今、辞書の見出し語のように説明されるがわのことばを (対象語)、説明し定義づけるのにもちいられることばを (説明語) とよぶとすれば、どうどうめぐりは、対象語と説明語がおなじ言語であるばあいにならずおこる現象である。…しかし、対象語と説明語がおなじ言語体系に属しているばあい、言いかえは、対象語を意味的な体系のなかに位置づけるという積極的な役割をはたしている。…現代語辞典で「書物」という見出し語を「本」と言いかえるとき、それは単なる意味の説明にとどまらず、これら 2 つの単語が現代語の体系のなかで類義関係にあることをもしめしているのだ。(宮島 (1966: 152-153))

このように、名詞の語義の説明は、辞書による違いが比較的小さい、ということができる。  
では、動詞の語義の説明はどうであろうか。例として、両者の「おく」の語義の説明を比較する。

- お・く **一** [置く] (他五) ①持っていたものを、机・地面などの上に移す。のせる。すえる。「コップを―・マイクのスタンドを―」  
 ②場所を占めるようにする。「鏡台の置いてある部屋・業界に身を―」  
 ③ [その位置に] 定める。「胸に手を―・語尾にアクセントを―・重点を―・この数式を t と― [=設定する]」  
 ④ [人をそこに] いさせる。「下宿人を―・るす番を―」  
 ⑤ [店で] 商品としてあつかう。売る。「日用品を置いている店」  
 ⑥ [制度・役職などを] 設ける。「仙台に支社を―・幹事を―」  
 ⑦ [その状態に] とどめる。「隣国を支配下に―・子どもを危険な状態に―」  
 ⑧あとに残す。「学校に教科書を置いて来た・私を置いて行かないで」  
 ⑨あいだをへだてる。「距離を―・一日置いて」  
 ⑩ [擱く] 作業をやめて、手をはなす。「筆を―」  
 ⑪預ける。「質に―」  
 ⑫「算木を―」  
 (『三国』、以下省略)

- お・く **【置く】** 一 (他五) **一** 〈どこになにヲ―〉人や物を、支えとなる物の上に移し、その場所に在る状態を保たせる。「いつも辞書をわきに―/手をひざの上に―/ここに荷物を―べからず/家族を置いて [=家に残して] 旅に出る/留守番を置いて [=頼んで] 出かける/いつも書生を二人か三人は置いて [=寄宿させて] いた/家政婦を― [=雇う] /下宿人を― [=下宿人に部屋を貸す] /金箔を― [=付ける] /事務所を― [=設ける] /質に― [=預ける] /―目―」  
**二** 〈なに・どこになに・だれヲ―〉ある状況下に位置させる。「管理下 (支配下) に―/監視の下に―/劣勢に置かれる/念頭に― [=心にとめる] /重きを―/信頼の置けない人間/二大国に挟まれ、緊張状態に置かれる」  
**三** 〈なに・どこになにヲ―〉特定の箇所に集約し、他に力を分散しないようにする。「…に主力 (比重・ウエート) を―/中心 (力点・眼目・重点) が置かれる/目標 (目安) に―」  
**四** 〈(なに・どこに) なにヲ―〉時間的・空間的な間隔を保たせる。「一行置いて [=飛ばして] /―歩距離 (猶予期間・時間) を―/時をおかず/心を― [= (a) 留意する。 (b) 相手に隔てがましくする] /気の置けない人」  
**五** 〈なにヲ―〉計算の道具を操作して、かぞえたり占ったりする。「そろばんを―/算木を― [=算木で占う] /八卦を―」  
**六** 〈なにヲ―〉そのものには手を付けない (変更を加えない) 状態を保たせる。「ただでは置か

んぞ [=必ず何か仕返しをしてやるぞ] / 仕事をやらずに—/そのままにして—/何はおいても / 箸を— [=食事をそこで中断する (おしまいにする)]

(『新明解』、以下省略)

『三国』では同義の語句で言いかえられる語義ごとにまとめているのに対し、『新明解』では共起する名詞とその格形式を提示した上で共起のそれぞれの型ごとにその語義を説明している、といったように説明の仕方が大きく異なっている。『三国』では、「下宿人を置く・るす番を置く」が「④ [人をそこに] いさせる」の、「私を置いて行かないで」が「⑧あとに残す」の、「仙台に支社を置く・幹事を置く」が「⑥ [制度・役職などを] 設ける」の各用例として挙げられているのに対し、『新明解』では、「留守番を置いて [=頼んで] 出かける」「いつも書生を二人か三人は置いて [=寄宿させて] いた」「家政婦を置く [=雇う]」「下宿人を置く [=下宿人に部屋を貸す]」「家族を置いて [=家に残して] 旅に出る」「事務所を置く [=設ける]」がいずれも「 $\square$ 〈どこニなにヲ〉人や物を、支えとなる物の上に移し、その場所に在る状態を保たせる」の用例として挙げられている。また、『三国』では、「重点を置く」が「③ [その位置に] 定める」の、「隣国を支配下に置く」が「⑦ [その状態に] とどめる」の各用例として挙げられているのに対し、『新明解』では、「…に主力 (比重・ウェイト) を置く」「中心 (力点・眼目・重点) が置かれる」が「 $\square$ 〈なに・どこニなにヲ〉特定の箇所に集約し、他に力を分散しないようにする」の、「管理下 (支配下) に置く」「監視の下に置く」「劣勢に置かれる」が「 $\square$ 〈なに・どこニなに・だれヲ〉ある状況下に位置させる」の各用例として挙げられており、同種の用例の語義の説明も、異なるとらえ方に基づいている、ということができる。

このように、動詞の語義の説明は、辞書によって大きな違いがある。動詞の語義をより客観的に記述することは可能だろうか。

## 2. 動詞の語義と結合関係

本稿では、第1節で見たような、『新明解』において〈どこニなにヲ〉〈なに・どこニなに・だれヲ〉〈なに・どこニなにヲ〉等の形で記述されている、動詞がある語義において用いられる際に共起する名詞とその格形式に注目する。

動詞の語義と結合関係とが対応し合うことは、しばしば指摘されている。例えば、Lyons (1977) は、Tessière (1959) に由来する「結合価 valency」に関して、動詞の語義と結合価の間の「相互依存 interdependence」に言及している。

It is obvious that there is a considerable degree of interdependence between the meaning of a verb and its valency; and several different attempts have been made recently to account for the valency of verbs within the framework of what has come to be called case-grammar. (Lyons (1977 : 488))

(動詞の意味とその結合価との間に相当程度の相互依存があることは明白である；そして、格文法と呼ばれるようになった枠組の中で、結合価を説明するためのいくつかの異なる試みが近

頃なされてきた。)

以下では、動詞の語義の記述に客観的な根拠を与える手がかりとしての、動詞の結合関係について、まず欧諸語に関するものからいくつかを見ていく。

## 2.1. Vinogradov (1954)

Tesnière (1959) よりも以前に、ロシア語について、Vinogradov (1954) が自立語間の結合「語結合 словосочетание」と「結合可能性 сщетаемость」に注目している。

Словосочетание организуется около одного знаменательного слова, являющегося стержнем словосочетания; это обнаруживается как в формальной, так и в смысловой его стороне. (Vinogradov (1954 : 232) )

(語結合は、語結合の中心となる一つの自立語の周囲に形成される；これは形式的側面<sup>3</sup>においても、意味的側面においても現れる。)

Словосочетание обычно образуется на основе слова, принадлежащего к той или иной части речи, в соответствии с правилами сочетаемости этого слова с другими словами. (Vinogradov (1954 : 234) )

(語結合は、何らかの品詞に属する語を中核に、その語の他の語との結合可能性の規則に応じて形成される。)

さまざまな型の語結合が形成される規則として、Vinogradov (1954) は、以下を挙げている。

1. Правила, в которых выражаются свободные синтаксические связи, свойственные отдельным частям речи и обусловленные характером соответствующих грамматических категорий.
2. Правила, которыми определяются способы построения разнообразных и многочисленных типов словосочетаний, имеющих в качестве «стержневого», главного члена слово, относящееся к любой части речи, с присоединенным к нему посредством предлога «слабоуправляемым» существительным.
3. Правила, которыми определяются в строе словосочетаний связи слов не только грамматически обусловленные, но и семантически ограниченные.
- 4 . Правила, которым определяется структура непродуктивных лексически связанных словосочетаний.

(以上、Vinogradov (1954 : 244-252) から)

---

<sup>3</sup> Vinogradov (1954) は、「語結合」の形式的根拠として、形容詞の名詞への性・数・格の一致、動詞による特定の格形式の名詞の支配（他動詞による対格の名詞の支配等）、動詞と副詞の隣接を挙げている。

- (1. 個々の品詞に固有の、対応する文法的カテゴリーの性質によって条件づけられた自由な統語論的つながりが、そこにおいて表される諸規則。
2. 「中心の」主要な成分として各品詞に属する語を持ち、それに前置詞によって「弱く支配される」名詞をとまう、多種多様な多数の型の語結合の構成方法が、それによって規定される諸規則。
3. 文法的に条件づけられてだけでなく、意味的にも制限されて、語のつながりが語結合の組立てにおいて、それによって規定される諸規則。
4. 語彙的につながれた、非生産的な語結合の構造が、それによって規定される諸規則。)

特に3、4から、語結合が文法的な組立てであるだけでなく、語義と密接な関係がある、ということがわかる。

## 2.2. Tesnière (1959)

Tesnière (1959) は語と他の語との *connexion* に注目し、「結合価 *valence*」を提案する。

Tout mot qui fait partie d'une phrase cesse par lui-meme d'être isolé comme dans le dictionnaire. Entre lui et ses voisins, l'esprit aperçoit des connexions, dont l'ensemble forme la charpente de la phrase. (Tesnière (1959 : 11))

(文の部分になっている全ての語は、辞書においてのようにもはや孤立して存在するのではない。それらの間には全体の形に文を構成する *connexions* があることに気づく。)

Les actants sont toujours des substantifs ou des équivalents de substantifs. Inversement les substantifs assument en principe toujours dans la phrase la fonction d'actants. ... Les circonstants expriment les circonstances de temps, lieu, manière, etc... dans lesquelles se déroule le procès. ... Les circonstants expriment les circonstances de temps, lieu, manière, etc... dans lesquelles se déroule le procès. ... Les circonstants sont toujours des adverbes (de temps, de lieu, de manière, etc...) ou des équivalents d'adverbes. Inversement les adverbess assument en principe toujours dans la phrase la fonction de circonstants. (Tesnière (1959 : 102-103))

(「行為項は常に実詞(名詞)もしくは実詞の相当語句である、逆に実詞は常に文中で行為項の機能を担っている」…「状況項はつねに副詞で、時、場所、様態の意味を担っている」… (小泉 (2007 : 113,117)))

On peut ainsi comparer le verbe à une sorte d'atome crochu susceptible d'exercer son attraction sur un nombre plus ou moins élevé d'actants, selon qu'il comporte un nombre plus ou moins élevé de crochets pour les maintenir dans sa dépendance. Le nombre de crochets que présente un verbe et par conséquent le nombre d'actants qu'il susceptible de régir, constitue ce que nous appellerons la valence du verbe. (Tesnière (1959 : 238))

(「動詞は、行為項の数に注目させる鉤のついた原子と比べることができる。よって、これは従



属させる行為項の数だけ鉤をもっている。動詞が示す鉤の数、つまり動詞が支配できる行為項の数が、動詞の結合価というものを形成している」(小泉 (2007 : 231))

### 2.3. Helbig (1971)

前掲の Tesnière (1959) の「結合価」に対し、Helbig (1971) は、従属成分の種類のみからを批判し、修正を加えている。

Der moderne Valenzbegriff ist in der Linguistik heimisch geworden vor allem durch Tesnière, der in Rahmen seiner abhängigkeitsgrammatik bei der strukturellen Satzanalyse vom Verb ausgeht und als dessen Untergeordnete „actants“ und „circonstants“ ansieht. Im Unterschied zu den „circonstants“ ist der Zahl der „actants“ im Satz durch das Verb begrenzt und determiniert. Die Fähigkeit der Verben, eine bestimmte Anzahl von Aktanten zu sich zu nehmen, vergleicht Tesnière mit der Wertigkeit eines Atoms und nennt Valenz. Dabei wird die Valenz bei Tesnière beschränkt auf Subjekte, Akkusativ- und Dativobjekte ausgeschlossen von diesen Beziehungen sind bei ihm die Präpositionalgruppen (d.h. Präpositionalobjekte und Adverbialbestimmungen) und die Prädikativa. Das Subjekt verliert seine Sonderstellung im Satz und wird zu einer Ergänzung – neben den andern Ergänzungen. Die Verben werden bei Tesnière nur hinsichtlich der Zahl, nicht auch hinsichtlich der Art der Aktanten klassifiziert. (Helbig (1971 : 32))

(現代の結合価の概念は、とりわけ Tesnière によって知られるようになった、彼はその依存文法の枠組みにおける構造的な文分析に際して、動詞から出発し、「行為項」と「状況項」をその従属成分とみなす。一定数の行為項をとる動詞の能力を、Tesnière は原子価にたとえ、結合価と名付ける。Tesnière のもとでは結合価は主語、対格目的語、与格目的語に制限され、前置詞句(前置詞付き目的語、副詞的修飾語)および述語属詞はこの関係から排除される。主語は特別な地位を失い、他の補語と並んで補語の一つとなる。動詞は Tesnière においては数のみの観点から分類され、行為項の種類のみからは分類されない。)

Helbig (1971 : 32) によると、ドイツ語の前置詞付きの名詞は以下のように分類される。

- (1) Mein Freund wohnt *in Dresden*. (私の友人はドレスデンに住んでいる。)  
in Dresden: obligatorischer Aktant (enge Verberänzung) 必須の行為項 (密接な動詞補足語)
- (2) Er wartet *auf seinen Freund*. (彼は友人を待っている。)  
auf seinen Freund: fakultativer Aktant (enge Verberänzung) 任意の行為項 (密接な動詞補足語)
- (3) Er aß sein Brot *in der Schule*. (彼は学校でパンを食べた。)  
in der Schule : freie Angabe 自由な添加語 (自由な動詞補足語)

Tesnière (1959) が従属成分を名詞からなる「行為項」と副詞からなる「状況項」とに分けているのに対して、Helbig (1971) は従属成分と動詞との意味関係に踏み込んで三分類している、というこ

とができる。

#### 2.4. Lyons (1977)

冒頭に引用した Lyons (1977) の結合価 valency についての言及について改めて見てみる。Lyons (1977) は、「... it is also quite clearly relatable to the predicate-calculus classification of predicators in terms of the number of arguments that they take in well-formed formulae (適格な式においてそれらがとる項の数によって述語動詞の述語計算分類にも明確に合致しうる)」としながらも、以下のように批判する。

But valency covers more than simply the number of expressions with which a verb may or must be combined in a well-formed sentence-nucleus. It is also intended to account for differences in the membership of the set of expressions that may be combined with different verbs. For example, 'give' and 'put', in their most common uses, both have a valency of 3, but they differ with respect to one of the three expressions which (in the extended sense of 'government') they may be said to govern: 'give' governs a subject, a direct object and an indirect object; and 'put' governs a subject, a direct object, a directional locative. We will therefore say that they differ in valency: they are associated with two distinct valency-set. (Lyons (1977 : 486-487))

(しかし、結合価は、単に核文において動詞が結合しうる、あるいは、結合しなければならない表現の数以上のことに及ぶ。異なる動詞と結合しうる一組の表現の帰属関係における相違を説明することも意図される。例えば、give と put は、その最も普通の使用において、ともに3つの結合価を持つ、しかし、それらは、それらが支配する(「支配」の最も広範な意味において)と言われうる三つの表現の一つに関して異なる: give は、主語、直接目的語、間接目的語を支配する; put は、主語、直接目的語、方向を示す所格を支配する。それゆえ、それらは結合価において異なる、とすることに: それらは二つの異なる結合価の組と関連する。)

Lyons (1977) に従えば、結合関係について、支配される表現の数だけでなく、それら自身が「間接目的語」であるのか、「方向を示す所格」であるのか、といった意味内容をも問題にしなければならない、ということになる。

### 3. 結合関係に現れる動詞の語義の特徴——日本語動詞において

第2節では、欧諸語において動詞の語義と結合関係との間に対応関係を見出した先行研究をいくつか見た。そこでは、従属成分がどの品詞からなるかだけでなく、それら従属成分と動詞との意味関係、従属成分自体の意味内容も問題になる、ということがいえる。

本節では、現代日本語動詞の語義とその結合関係について言及されたもののうちいくつかを見る。

#### 3.1. 奥田 (1968-72) と宮島 (1972)

現代日本語動詞の語義と、その動詞が用いられている結合関係との密接な関係を提示したのは、

奥田 (1968-72) が初めてであろう。

ふたつのカテゴリー、つまりもようがえのむすびつきととりつけのむすびつきとのちがいは、まさにこの語彙的な意味の性格のちがいのうえになりたっているのである。(奥田 (1968-72 : 30)

(引用注: 「もようがえのむすびつき」 = 「着物を たたむ」等「物を ~する」、「とりつけのむすびつき」 = 「ゆかたに たすきを かける」等「物2に 物1を ~する」)

奥田 (1968-72) 他、現代日本語「連語論」研究は、Vinogradov (1954) 等ロシア語文法、特に「語結合」研究の影響のもとに成立したとされる(言語学研究会編 (1983 : 3-5)、宮島 (2005))。

一方、宮島 (1972) は、「語的意味の形式的側面」「範ちゆう的な側面」という言い方で、特定の格形式の名詞と動詞との結合関係と、その動詞の語義について、以下のように規定している。

…他の単語の語形によって示された条件というのは、「文法的文脈」といいかえることができるだろう。たとえば、

- まちへ かえる (移動)
- まちを つくる (はたらきかけ)
- まちで あそぶ (動作)
- まちに いる (存在)

などでは、それぞれ、動詞自身の語形ではなくて、これと結びついている「まち」という名詞の語形が、これらの動詞にとって文法的条件になっているのである。「まちへ」「まちを」などと名詞の語形がそれぞれにちがっていることが、これと結びつく動詞の意味的な側面を明らかにする。たとえば「まちへ」というかたちと結びついていることは、「かえる」という動詞がそのような帰着点を必要とする移動の動作をあらわすことを示している。「まちを」という名詞のかたちと結びついていることは、「つくる」が、何か対象に対してはたらきかけるという側面をもった動詞であることを示している。… (宮島 (1972 : 669-670))

文法的条件は、ある動詞が移動であるか、はたらきかけをもっているか、というような意味の形式的側面を明らかにする。…「まちへ」という語形と結びつくことは、「かえる」という動詞のあらわす動作が移動であることを示している。…ここで語的意味の形式的側面とよんだものは、見方をかえていえば、範ちゆう的な側面といってよいかもしれない。すなわち、「かえる」という動作を規定すれば、「もといた場所への移動」というようなことになるだろうが、つまり「移動」ということは「かえる」の上位概念なのであって、どのような上位概念に属する動作であるか、どのような範ちゆうにはいる動作であるかを明らかにするのが、文法的性質の役わりだといえるのである。… (宮島 (1972 : 671))

どのような結合関係において用いられているか、という動詞の文法的ふるまいに、その動詞の「語  
いの意味の範ちゅう的側面」としての語義の特徴が現れているとすれば、その動詞の語義のより客  
観的な記述が可能になるであろう。

では、動詞が用いられている結合関係をその動詞の語義記述にどのように応用すればよいであ  
ろうか。そもそも、現代日本語において、動詞が用いられている結合関係として何をとりあげればよ  
いのであろうか。

次に、動詞が用いられる結合関係を記述した例として、村木（1991）、小泉（2007）を見る。

### 3.2. 村木（1991）

村木（1991）は、「自立的な単語には、他の単語とむすびつく能力がある。他の単語をうける能力  
や他の単語にかかる能力がそれである。」とし、動詞の「結合能力」を以下のように規定する。

動詞を述語とする文は、あるできごとをあらわしている。そのできごとは、多くは運動であ  
り、状態や関係をあらわしている場合もある。そうしたできごとは、運動や状態・関係そのも  
のをあらわす動詞と、それらに参加するメンバーをあらわす名詞あるいは名詞相当語句とによ  
って表現される。…

運動や状態・関係をあらわす動詞とくみあわさって文をつくる参加メンバーとなる名詞は、  
…さまざまな意味をもつが、それらの名詞はいずれも、それぞれの文の中で、動詞の語彙的な  
意味を具現化するために必要な要素として、動詞によってもとめられたものである。…（村木  
（1991 : 142-143））

一方、名詞の格形式として、村木（1991 : 144-145）は、「構文のかなめとなり、主語や目的語の機  
能を果たす文法格」「他の格形式よりも優位にある」＝「ガ、ヲ、ニ（与格）」、「広義の場所格」＝  
「ニ（位格）、カラ、へ」、「基準・異同・対称・比較などの抽象的な関係をあらわす関係格」＝「ニ  
（依拠格）、ト、ヨリ」、「副詞相当語句をつくる状況格」＝「デ」、「数量格」＝「φ」という分類を  
行い、「空間的位置」[ガ/ヲ、ニ]、「非空間的位置」[ガ/ヲ、ニ]、「空間的起点」[ガ/ヲ、カラ]、  
「空間的着点」[ガ/ヲ、ニ]、「方向」[ガ/ヲ、へ]等、「日本語の動詞の構造を、名詞の格形式お  
よび範疇的意味と動詞の範疇的意味とを手がかりとして分類し類型化しようとした」30の「名詞と  
動詞とのあいだになりたつ関係概念」「叙述素」を提示している（148-167）。

### 3.3. 小泉（2007）

小泉（2007）は、Tesnière（1959）に基づいて、結合価による現代日本語についての分析を提唱す  
る。

- (a) 「文法系列」：「属格〈ノ〉」「主格〈ガ〉」「対格〈ヲ〉」
- (b) 「場所系列」：「位置格〈ニ〉」「起点格〈カラ〉」「着点格〈へ〉」（「経路〈ヲ〉」）

- (c) 「付帯系列」: 「具格〈デ〉」「主題格〈ハ〉」「共格〈ト〉」
- (d) 「有界場所系列」: 「比格〈ヨリ〉」「到格〈マデ〉」

という「日本語の格助詞の体系」を提示し、それぞれの「格系列」の「意味役割」としてまとめている(80-87)。

#### 4. 特定の格形式との結合関係による動詞の語義記述

##### 4.1. 「格」記述の問題点

第3節では、奥田(1968-72)、宮島(1972)による、動詞の語義の特徴とその動詞が用いられている結合関係とは密接に対応し合う、という指摘と、村木(1991)、および、Tesnière(1959)に影響を受けた小泉(2007)による、現代日本語動詞の結合関係に関する記述の一例を見た。

しかし、動詞が用いられている結合関係をその動詞の語義の分析に用いる際には、以下のような問題が生じる。

- (1) 「主格」「対格」「与格」等の「格」の形式、およびその意味は、普遍的なものか。

例えば、nominative は、「主格」と訳され、「名詞+が」と同等であるとみなされることが多いが、nominative について、Blake(2001)は以下のように述べている。

The term nominative ... means 'naming'; the nominative is the case used outside constructions, the case used in isolation, the case used in naming. In most languages nominative bears no marking, but consists of the bare stem; it owes its status as nominative to the existence of marked cases. (Blake (2001 : 30)

(nominative という用語は、『名づけること』を意味する；nominative は構文の外側で用いられる格、孤立して用いられる格、名づける際に用いられる格である。たいていの言語において nominative は標識を持たず、語幹そのままからなる；それは nominative としての地位を有標の格の存在に負っている。)

- (2) Tesnière(1959)においては、動詞と結合している名詞を「行為項」、副詞を「状況項」として、結合関係が分析されている。このような考え方を現代日本語に直接適用できるであろうか。

例えば、移動に関係する地点、存在地点等は現代日本語では「名詞+を」「名詞+に」等の何らかの格形式の名詞によって表されるのが通常である。さらに、第3節で見たように、村木(1991)が「名詞+に」を「与格」「位格」「依拠格」に、小泉(2007)が「名詞+を」を「対格」「経路」に、それぞれ分割していること、また、同じ格形式であっても両者がことなる位置づけをしていることは、記述の困難さを象徴している。

##### 4.2. 特定の格形式の名詞との結合からみた動詞の語義の特徴

宮島(1972)は、「動詞の文法的性質」の一つとしての「連語論的性質」について、以下のように

規定している。

…動詞の文法的性質のうちで意味記述ともっとも直接に関係するのは、連語論的性質だ。…連語論的性質は、はじめからそのうちに実質的要素をふくんでいる。連語とは、ほかの単語とのむすびつきだから、語間的条件がきりはなせない。

道をつくる

道ながめる

道あるく

これらにおける名詞と動詞との関係は、それぞれちがっている。つまり、これらはちがった型の連語に属する。この連語としての関係そのものは文法的なものであり、したがって、このような名詞とむすびついてこのような関係をつくりうることも、おのおのの動詞の文法的性質（能力）ではあるが、その性質をささえているものは、これらの動詞の意味上の性格である。

（宮島（1972：686））

同じく「道を」と結合しているが、それぞれ「ちがった型の連語に属する」、そして、そのような「動詞の文法的性質（能力）」が「動詞の意味上の性格」によって「ささえ」られているとすれば、「道を」が動詞とのどのような意味関係にあるかも、「動詞の意味上の性格」つまり動詞の語義の特徴によって決定される、ということができる。

現代日本語の名詞の格形式の全体像については改めて考察することにし<sup>4</sup>、名詞の格形式のいくつかの用法に注目する（以下の（B）（C）（D）とその例は拙稿（2017）による<sup>6</sup>）。それらの中のを動詞の語義の記述すべき特徴の根拠とするかは今後の課題であり、以下の各動詞の語義の特徴は暫定的なものである。

（A）「名詞+が」は、増井（1997）によれば、「名詞+が 名詞」のような連体修飾関係を示していたものが、「主格」を示すようになったとされる。いわば、動作・状態・存在の「持ち主」として、「主体」を表すようになった、とすることができるのではないかな。

「が」の起源は、連体修飾語にある。「が」は、「梅が香」「我が君」のように、すぐ下の体言を修飾することばであった。それが、「言問はぬ木すら妹と兄ありとふをただ独り子にあるが苦しき」（万葉集）に見られるように、形式的には連体修飾語でありながら、意味的には主格を示す一時期をもつに至る。そして、「まいて雁などのつらねたるが、いと小さく見ゆるはいとをか

<sup>4</sup> 現代日本語の格形式として何を取り上げるかは記述によって異同があるが、例えば鈴木（1972）は、連用的な格として「―（ゼロ）」「―が」「―を」「―に」「―へ」「―で」「―と」「―から」「―まで」を挙げている。

<sup>5</sup> 文の成分としての特定の格形式の名詞の位置づけについても検討が必要であろう。例えば、早津（2010）は、鈴木（1972）において「状況語」と位置づけられるような「家につく」における「家に」、「会場からでる」における「会場から」、「駅まで歩く」における「駅まで」を、「補語」として位置づけている。

<sup>6</sup> 「名詞+が」以外の格形式の名詞と動詞との結合の詳細については言語学研究会（1983）参照。

し。」(枕草子) …主格を示すようになる。したがって、主格とはいうものの、どこか連体修飾語のおもかげが残っているのが「が」である。だからこそ、短く早くまとまろうとして、文末に影響しないようである。(増井 (1997 : 3-4))

(B) 「名詞+を」および「名詞+に」は、結合する動詞によってその文中での意味が異なる。つまり、結合している動詞の語義の特徴によってそれらの文中での意味が決定される、ということができる。

例えば、「ドアを 開ける」において「ドアを」は動作を受ける物を表しており、「開ける」は物への動作という語義の特徴を持っている動詞である、ということができる。また、「顔を 見る」において「顔を」は知覚される物を表しており、「見る」は知覚という語義の特徴を、「家を 出る」において「家を」は出発地点を表しており、「出る」は出発という語義の特徴を、「廊下を 通る」において「廊下を」は通行地点を表しており、「通る」は通行という語義の特徴を、それぞれ持っている動詞である、ということができる。

同様に、「先生に 会う」において「先生に」は動作の相手を表しており、「会う」は相手を必要とする動作という語義の特徴を、「あなたに あげる」において「あなたに」は物を与えられる相手を表しており、「あげる」は相手に物を与える動作という語義の特徴を、「玄関に 立っている」において「玄関に」は存在地点を表しており、「立っている<sup>7</sup>」は特定の地点における存在という語義の特徴を、「家に 帰る」において「家に」は到着地点を表しており、「帰る」は特定の地点に到る移動という語義の特徴を、それぞれ持っている動詞である、ということができる。

(C) 「名詞+で」は、用いられる名詞の種類によってその意味が決定される。

例えば、「手で 紙を ちぎる」において「手で」は動作の手段を、「本郷で 生まれる」において「本郷で」は動作の地点を、「バテ気味で 階段を 登る」において「バテ気味で」は動作の様態をそれぞれ表しており、これらは名詞の語義の特徴によって決定されるということができるが、それとともに、「ちぎる」は手段に言及できる動作という語義の特徴を、「生まれる」は動作（存在でなく動的な）という語義の特徴を、「登る」は様態に言及できる動作、という語義の特徴を、それぞれ持っている動詞である、ということができる。

(D) 「名詞+から」「名詞+まで」「名詞+へ」は、結合する動詞が異なっても、その意味に共通性がある。

例えば、「引き出しから 用紙を 取り出す」における「引き出しから」は「用紙」の移動の起点を表しており、「(用紙を) 取り出す」は起点に言及できる物の移動という語義の特徴を持っている動詞である、ということができる。「駅前から バスに 乗る」における「駅前から」も移動の起点を表しており、「バスに 乗る」という結合において、起点に言及できる移動という特徴を持つよう

---

<sup>7</sup> 「立っている」という形で存在を表す場合、「立つ」の用法の中で一つの確立されたものであるとみなすことができる。奥田 (1967 : 17-19) 「形態的にしぼられた」意味を参照。



になる、ということが出来る。

また、「角まで 歩く」において「角まで」は移動の終点を表しており、「歩く」は終点に言及できる移動という語義の特徴を持っている動詞である、ということが出来る。

さらに、「ホームへ 出る」における「ホームへ」、「おばあさんのところへ 持っていく」における「おばあさんのところへ」は、ともに移動の終着点を表しており、「出る」は人の、「持っていく」は物の、終着点に言及できる移動という語義の特徴を持っている動詞である、ということが出来る。

(A) では何の動作・状態・存在であるのかということに、(B) では結合する名詞の文中での意味が決定されることに、(C) (D) では特定の意味を表すような名詞の格形式と結合しうること、各動詞の語義の特徴が現れている、ということが出来る。

#### 4.3. 名詞との結合関係から明らかになる動詞の語義の特徴例

4.2 で見たような、特定の格形式の名詞と動詞との結合において、その動詞の語義の特徴が最も明確に現れるのは、(A) 主体を表す「名詞+が」との結合の場合、(B) 動詞によって文中での意味が決定される「名詞+を」「名詞+に」との結合の場合であろう。名詞の語義の特徴によって文中での意味が決定される (C) 「名詞+で」、および、格形式自体が自律的に意味を持つ (D) 「名詞+から」「名詞+まで」「名詞+へ」と結合可能であることは、動詞の語義がそれらの成分の意味と共通する特徴を持っている、ということでは出来るが、必ずしも明確に現れない場合もある、といえる。

以下、「名詞+が」「名詞+を」「名詞+に」との結合から明らかになる動詞の語義の特徴のごく一例を見る。

##### 4.3.1. 「名詞+が」との結合から明らかになる動詞の語義の特徴例

- (1) 一階には、大家のおばあさんがひとりで暮らしている。(『ポプラの秋』18)

「おばあさんが 暮らす」という結合が用いられている。「暮らす」と結合するのは通常「人が」であろう。「暮らす」は人の動作という語義の特徴を持つ動詞である。

- (2) 「……そしたらね、手紙があったから電話したって」(『ポプラの秋』7)  
(3) でもその声には、なんだかからかっているみたいな感じがあって、私は少し、くやしい。  
(『春のオルガン』5)

動詞「ある」が、(2) では「手紙が」と、(3) では「からかっているみたいな感じが」と、それぞれ結合している。「手紙」は物であり、「からかっているみたいな感じ」は「声」が帯びている特徴である。このように、「ある」と結合している「名詞+が」が物なのか、特徴なのかという名詞の語義の特徴に応じて、「ある」の語義の特徴が決定されている、ということが出来る。



- (4) そして庭の真ん中に、時折かすかな上空の風に葉を揺らしながら、その大きな木が立っている。(『ポプラの秋』15)
- (5) 蒸し暑い廊下を抜けると、店のカウンターの向こうに馴染みの客が立っていた。(『光媒の花』9)

(4) では「庭の真ん中に その大きな木が たっている」という結合が、(5) では「カウンターの向こうに 客が 立っている」という結合が用いられている。(4) においては動くことのない物が存在することが表されており、(5) においては店への移動の結果として人が存在することが表されている。「立っている」と結合している「名詞+が」が物なのか、人なのかという名詞の語義の特徴によって、「立っている」の語義が決定されている、ということができる。

#### 4.3.2. 「名詞+を」との結合から明らかになる動詞の語義の特徴例

- (6) 夕方になって、おばあさんが蚊取り線香を足もとに置き、頭に手拭いをかぶって草取りを始めたりますと、私は窓から少し身をひき、おばあさんに見つからないようにして、やっぱり木ばかり見つめていた。(『ポプラの秋』20)
- (7) こんなことを言うのは、毎日私のために食事を作ってくれていた母に対して不当だとはわかっているけれども、たぶん私は息苦しかったのだ。母が働きすぎて、疲れすぎて、いつか父のように私を置いていなくなってしまうのではないかと不安がってばかりいることが。(『ポプラの秋』113)

(6) では「蚊取り線香を 足元に 置く」という結合が用いられ、物を移動させることが、(7) では「私を 置く(置いて いなくなる)」という結合が用いられ、人を「置去りにする」ことが、それぞれ表されている。「置く」と結合している「名詞+を」が物なのか、人なのかという名詞の語義の特徴によって、各用法における「置く」の語義の特徴が明らかになる、ということができる。

#### 4.3.3. 「名詞+に」との結合から明らかになる動詞の語義の特徴例

- (7) 駅前通りに出る手前に、公園があって、植込みに沿って、街灯が寂しげに道を照らしている。(『雲の宴(上)』266)
- (8) 「…ゲリラにルーマニア製自動小銃が渡ったことがわかれば、その政府が、自動車や農耕機具の輸入停止という報復手段に出ることだってありうるのです」(『雲の宴(上)』334)

(7) では「駅前通りに 出る」という結合が用いられ、特定の地点に至る移動が、(8) では「報復手段に 出る」という結合が用いられ、特定の活動に至ることが表されている。「出る」と結合している「名詞+に」が場所なのか、活動なのかという、名詞の語義の特徴によって、各用法における動詞「出る」の語義の特徴が明らかになる、ということができる。

以上、極めてわずかな場合ではあるが、名詞の格形式との結合関係を、動詞の語義の特徴の記述にどのように応用できるか、その一部の考察を試みた。具体的にどのような記述が可能になるか、このような語義の特徴から明らかになる動詞の語彙体系はどのような姿であるかについては、改めて調査していきたい。

## 参考文献

- 岡田幸彦 (2017) 「現代日本語の連用成分についての一考察——名詞の文法的意味・動詞の語義から」  
埼玉大学教養学部リベラル・アーツ叢書別冊 2 『仁科弘之教授退職記念論文集——言語に  
ついての X 章』 142-156
- 奥田靖雄 (1967) 「語彙的な意味のあり方」(奥田靖雄 (1985) 『ことばの研究・序説』むぎ書房 3-20)  
—— (1968-72) 「を格の名詞と動詞とのくみあわせ」(言語学研究会編 (1983) 21-149)  
言語学研究会編 (1983) 『日本語文法・連語論 (資料編)』むぎ書房
- 小泉保 (2007) 『日本語の格と文型』大修館書店
- 鈴木重幸 (1972) 『日本語文法・形態論』むぎ書房
- 早津恵美子 (2010) 「連用修飾語の解体」『国文学解釈と鑑賞』2010年7月号 60-68
- 増井金典 (1997) 『「が」と「は」についての研究』滋賀県立短期大学
- 宮島達夫 (1966) 「意味の体系性」『語彙論研究』(1994)  
—— (2005) 「連語論の位置づけ」『国文学解釈と鑑賞』平成17年7月号 6-33
- 村木新次郎 (1991) 『日本語動詞の諸相』ひつじ書房
- Blake, B. J. (2001) *Case. Second edition*. Cambridge University Press.
- Lyons, J. (1977) *Semantics. Volume 1, 2*. Cambridge University Press.
- Helbig, G. (1971) „Theoretische und praktische Aspekte eines Valenzmodells“. *Beitäge zur Valenztheorie*.  
The Hague: Mouton.
- Tesnière, L. (1959/1988) *Elements de syntaxe structurale*. Paris: Klincksiek.
- Виноградов, В. В. (1953) «Основные типы лексических значений слова».  
*Избранные труды. Исследования по русской грамматике*. Издательство «Наука», 1975  
(Vinogradov, V. V. (1953) 「語義の基本型」『選集 ロシア語文法に関する諸研究』)  
—— (1954) «Вопросы изучения словосочетаний».  
*Избранные труды. Лексикология и Лексикография*. Издательство «Наука», 1977  
(—— (1954) 「語結合研究の諸問題」『選集 語彙論と辞書編纂学』)
- 【辞典】
- 『三省堂国語辞典第七版』(2014)
- 『三省堂新明解国語辞典第七版』(2012)
- 【用例】
- 辻邦生『雲の宴 (上)』朝日文庫
- 道尾秀介『光媒の花』集英社文庫
- 湯本香樹実『春のオルガン』『ポプラの秋』新潮文庫